作　文　の　指　導

——特に3年生の実際について——

田　辺　啓　三

1 はじめに

新しい学習指導要領では，作文指導について「作文を主とする学習には年間授業時数の 2/10 以上を充てるもの」と明記され，作文指導の重要性が強調されている。しかし，作文の必要性を最も痛感しているのは，毎日生徒に接しているわれわれ現場教師である。それにも拘らず，従来，この指導が十分に行なわれていなかったことも事実で，だからこそ，今度の改訂では，はっきりとその時間数が打ち出されたものと思う。そして，作文指導に関する各研究会や発表が，方々で活潑になされ，その心構えもじょじょに出来あがっているが，それでもなお，指導や評価等についての幾多の困難さを，どう打開してゆくかに，そして，実際には，どのように指導してゆけばよいのかに，心を砕いている教師も多いのではないだろうか，私もその1人であるので，ここに試案（実際今年の3年生に行なったもの）を発表して，御意見や御指導を仰ぎたいと思う。

2 時間特設について

時間特設の問題については，是非両論が行なわれている。指導要領では，「作文を主とする学習」とあって，その意味は，作文の活動だけの計画のほかに，聞く，話す，読むの学習と関連させて計画する場合も含まれている。そして，どのような学習活動も，「相互に関連させて有機的に指導し，片寄りのないようにすること」が留意事項に示されている。文法時間の特設が，機械的な文法学習に終るおそれがあるように，作文時間特設に反対する意見も首肯されるが，人情は易きに就くというように，作文時間のないことが，ともすれば軽視の気持とつながって，次第になおざりになるのではないかとおそれる。従って，時間特設に賛成であるが，2/10以上の時間を設けることは，現在の実情からいって無理と思われる。私は各学年とも2/10を最大限として作文時間を特設したい。それを各学年に配当すると

1	年	21時間
2	年	14時間
3	年	14時間

が基準となる。（ただし，1年も14が考えられる。）

3 内容について

作文の学習活動は，指導要領の「書くこと」で9項の指導事項が掲げられ，学習活動は

ア　通信，記録などを書く。
イ　説明，報告などを書く。
ウ　論説などを書く。
エ　感想，感動などを文章に書き表わす。

の4項のほかに，「聞くこと，話すことおよび読むことの指導で行なうメモ，要約，抜粋，詳述」などの書くことをも含めている。

この内容を，整理して，3ケ年に分配すると，次のような一例が考えられる。

1年，生活中心の文

これは，通信，記録など，身近な実用的なもので，主として自己を中心とした記録である。日記，書簡などが学習活動で最も取り上げられると思うが，本校では以前から1年の夏期休暇に自叙伝の宿題を課している。

2年，創作中心の文

ここでは，「エ」の感想や感動などを文に書き表わすもので，随筆，小説，詩歌などを行なう。2年生は高校生の中で最も自由な活動ができる学年であり，また成長も大なのでさまざまな活動を行なわせたい。

3年，論説中心の文

ここでは，高度の思索や，思想を要求するものとして，あるいは自己の内奥を見つめるもとしての文を心掛ける。それは，高校生の完成であり，総仕上げであると考えられる。

その他の内容については，各学年において適宜配当してゆきたい。

以上の3単元の学年配当については，1年の生活文は良いとして，2年，3年は逆にしても良いかと思われるが，現行の教科書でも2年がより芸術的文章が多く，3年がより論説，評論的な文章が多いようでもあり，また，詩歌の指導などは2年が適切であり，高校生として最も思想の深まった3年生に，論説文の指導を行なう方が効果的と信じている。

なお，作文指導の教師は，そのクラスの「現代国語」の指導者と同一人でなければならないと思う。それではじめて，相互に関連した有機的な指導も十分に行なわれるべきである。

4　3年生の実際について

以上のような理由で，3年生の作文指導は年間14時間で，単元は論説文を中心にしたものとして，年間の授業計画をたててみたい。私は，本年度に，実際にやってみて，その成果を反省してみた。年間計画は次の通り。

○1　論説文の書き方
　2　1のつづき
○3　作文　「平等」
　4　批評　範例文の鑑賞と生徒作品の批評・添削
○5　作文　「友情」
　6　批評　模範作文に完成するための反覆添削
○7　作文「学」を使った2字の熟語
○8　批評　語い，語句の豊かな使用と教養養成の技術方法
　9　自由作文
　10　批評　8の批評の項目と同意図
○11　作文　「現実」
○12　批評　自己の内省と現実直視の態度，人生観の養成，受験作文の書き方
○13　作文　「詩」を読んで
　14　まとめ，作文学習の総括

他に，家庭で行なう宿題作文を3回。（○印をつけたものは実施）

A　論説文の書き方の指導

一，作文の基礎の心構え（これは低学年で既修すべきものである。）

1　取　材　　イ　取材メモ

　　ロ　観 察 力

　　ハ　思 考 力

　　ニ　素材の選択と決定

2　構　想　　イ　主題の決定

　　ロ　構想　a構成　b段落

3　表　現　　イ　叙　述　　語い，語句の使い方　　修　辞

　　ロ　推　敲　　内容と表現について

二　論説文の書き方

1　論理的な構想

イ　序論，本論，結論

ロ　三段論法

ハ　演繹法，帰納法

（佐藤信衛氏著「論理学案内」参考）

B　作文「平等」（論説文）

参考文「国際の民主主義」横田喜三郎氏著

評　従来作文指導を怠っていたために，生徒の表現力の不足，かなづかいや漢字の誤り，語句の使い方の誤り，原稿用紙の使い方の無知がかなり多かったので，その方面の指導も痛切に感じ，作文指導は，やはりもっと徹底的に行なわなければならないと思った。内容は横田氏の文章で自由と平等，民主主義などの懇切な紹介があったので，生徒は比較的書き易かったと思われる。

C　作文「友情」（感想文）

第1回の作文練習で，ごく基礎的な心構えもまだ十分に会得されていないということがわかったので，自由な作文を作らせてみたいと思い，「友情」という題で，形式自由の作文ということにした。前回に較べて，作文技術の習得は相当達せられた感じがした。

なお，前2回の作文についての批評は，個々の生徒に注記し，全般には5分位の時間で済ませた。

D　作文「学」を使った2字の熟語（論説文）

題を既定させる作文と，自由題の中間をねらう意図で行なった。さまざまな形態の出題になれさせるねらいと，批評の時間で取扱う含みも持っている。

E　批評と整理

題を整理してみると次のようになる。

学生（9名）学問（9名）学歴（6名）科学（5名）哲学（3名）学者（3名）学閥（3名）大学（3名）2名のものは，学力，医学，語学，文学，共学の五題であり，他は1名である。おもなものは，就学，学才，学割，学園，学位，無学，独学，学校，博学，学業，学識，進学，学徒，史学等であった。対象生徒は2クラス，約80名であるが，このように，多様な題名があらわれたのはおもしろい現象で興味深かった。

既に一通りの書き方の説明も済み，2回の練習も終っているので，幾分上達のあとが感じられた。もっとも，時間は45分位で，その場で題を与えたため，十分に構想も練られず，書いた分量が400字詰めで200字内外のものが1クラスに3名おった。しかし，大半は，400字から，600字ぐらいまで書いており，なかには800字を越した者も数名あった。

これを，前回の作文の評価と比較してみると次のようになる。（1クラスで提出生徒45名）

評　価	A	B	C
第 1 回	9	24	12
第 2 回	8	28	9
第 3 回	14	26	5

この3回で効果を語ることは勿論不可能であるが，少なくとも，表現面における誤りをおかす生徒が少なくなったことは事実であり，全体に書き方になれてきたという感じがする。

今回の批評の重点は，語いを豊かにすること，そのためには多くの読書が必要である，語句に興味を覚える，修辞上の技巧などについての知識も心得ておくことなどを教え，第2に，豊かな思想，教養を養うこと，思索と内省を伴なった生活を行なうこと，読書による教養を深めることなどを主として行なった。

F　宿題作文

近松門左衛門作「冥途の飛脚」の「新口村」の読後感，読書評

ここでは，論説と評論の区別を明確にする。評論は客観的な対象を取扱い，従ってその対象に対しての正しい理解から始まることに注目させる。ただし，読書評の場合は，読後感というような感想文的な作文も考えられるので，今回はいずれでもよいことにした。

G　作文「現実」

論説文の第2回の題名を「現実」とした。時期は11月なので，受験作文の練習をもかさねて，時間は30分で400字以内と限定して課した。ここでは，論説文の形式を十分に理解して書くことを重視した。すなわち，前記の論説文の書き方を考慮し，問題をはっきりつかんで，それに性格を与え，1つの方向にもってゆくとともに，それに対する建設的な動向や，解決への提示という面までも書き表わすように要求した。

H　批評と整理

生徒の作品を読んで同論旨のものを整理すると次のようになる。

1　現実を大切なものと重視している者　20名
2　現実をみつめて，そこから理想に進む意見の者　63名
3　理想を善と見，現実を悪と見る者　58名

予想された作文は，現実に対して理想を掲げ，その対比で論じている生徒が多いだろうと思ったが，予想通り，大半の生徒は，理想と現実という考え方で書いてあった。前記のうち，1は，理想をごく軽く扱ったか，あるいは理想にはふれないで，現実こそ生きている唯一の真実であるから，これを，大切に扱わねばならないという論旨が主であり，現実即生活という気持で書いてある。2は，善なる理想が彼方にあり，人間は理想に向かって生きてゆくことこそが生甲斐であるが，そのためには現実をみつめて，一歩一歩現実を理想に近づけるよう努力して行かねばならないという論旨である。3は，理想は善なるものである，故に，現実は悪であり，いやなものである，従って，現実を認めないで，理想に向って進まねばならない。すなわち，理想に向って進むためには，現実を破壊し，改善してゆかねばならないと主張するものである。この3傾向の主張は，それぞれ生徒自身まじめに考えた意見と見なされるが，第3の意見の者が58名もあり，それらが，観念的な考えに強く支配されているように感じられる。高校3年生は，11月の頃になると，大学受験の勉強に総てを打ちこんでいる時期なので，今の生活

がみな灰色に見えるのも現実だろう。そして，この作文が，受験練習の意図のあることも影響されたのであろう。そういう気持を推して読んだ場合には，なるほどと納得ゆく心もあるが，はじめ一続した時には，あまりに強い現実忌避の傾向が多く見られたのでわたくしも驚いた次第である。本校の生徒がほとんど進学するという理由もあろうが，3年生の教育は，やはり受験ということを十分汲んでやらねば，実際その指導も難しいということを痛感する。教育の理想論が，受験生の現実論といかにうまく結ばれるかが，この作文を通しても大きな問題として残ると思う。

I　作文「詩」を読んで

三好達治の詩　「雪」

太郎を眠らせ　太郎の部屋に雪ふりつむ

次郎を眠らせ　次郎の部屋に雪ふりつむ

この詩の主題をあつかって作文させるもので，これも受験作文の練習として行なったものである。これは3学期に実施したので，まだ整理ができていない。意図は，作品の正しい鑑賞力，正確な主題の把握のしかた，そして表現力と創作力の養成にある。

この後，最後のまとめが残っているが，ここでは3年生で学習した作文をもう一度振り返って，その不備を整え，さらに，作文全般にわたっての基礎的な事項を総括したいと思う。高校の作文学習の総まとめとなるような意義を持たせなければならない。

以上の実施事項は，作文時間を特設したわけではなく，国語甲の時間を割いて行なったもので，実施時間は8時間となっているが，実際は国語甲の授業として行なったものが2回。A，論説文の書き方，B，作文「平等」がそれであり，進学模擬考査の一環として行なったものに，G，作文「現実」I作文「詩」を読んで，の2つがある。さらに，私の都合で授業できなかった際に，D，作文「学」を使った2字の熟語を題としたものを課した。今年度の始めに，新しい指導要領に基く作文指導の実際を行なうと思ったのであるが，年間14時間の時間をさくのがつらくて，結果としては，きわめて粗末な試みに終ったが，いくら意欲に燃えてやってみようと思っても，特設の時間がなければ，どうしても，「現代国語」の方に時間が使われるのではないかと，今から危惧している。

なお，以上のような理由で，全クラス同じ時間をとることができず，8時間は最大限のクラスについてのものである。ちなみに，3クラスの作文実施は次の通りである。

Aクラス平等，友情，学の熟語，新口村の続後感，現実，詩を読んで

Bクラス平等，友情，学の熟語，現実，詩を読んで

Cクラス平等，現実，詩を読んでCクラスが，練習時間が極めて少なくて遺憾であったが，その反面，よくやったクラスとの比較ができて，その効果の結果を確めることができたという現象が見られる。教師が自己の研究の材料のために，一部生徒を不当に軽視する態度は好ましいことではないと信じているので，故意にこのような差別教育をする意志はないが，今回はからずも見られる作文回数の差は，たしかにそれだけの効果が，作文回数が多ければ多いほどあがるという自信が持てた。しかし，具体的な説明は省略したい。

5　その他の問題について

以上，今年1ケ年の3年生の作文指導の実際について述べてみたが，この程度の作文学習は，元来，過去において行なわれていなければならない。新しい指導要領による作文指導は，更に系統だったものでなければならない。と同時に，他の活動，「読むこと」「話すこと」「聞くこと」の学習と，有機的な関係を保たねばならない。従って，作文関係の教材は勿論の

こと，他の活動の場合でも，メモ，要約の練習を適時行なうよう心がけるべきであろう。また，抜粋や詳述の練習も怠ってはならない。これらの系統的な指導も今後の問題として残ろう。

次に，50分の時間での作文の字数は，最高の生徒でも800字が限度であり，大多数の生徒は400～600字がせいぜいである。従って，教室で行なう作文指導は短文を主にしなければなるまい。国語教科書の適当な部分を選んで，その大意を書くとか，簡単な1つのテーマ，たとえば，学校，友人，生徒会，人生など，生徒に身近かな問題とか，関心の深い思索的なものをえらんで200字ぐらい書く練習を繰返すことが大切であろう。更に，書いた作文を添削することが，事後処理として重要である。この添削も，教師の懇切な添削をやったり，あるいは，生徒の相互添削なども案外有効であり，かつ時間もはぶけて両得である。従って長文の練習は，1時間内で書く場合もあるが，宿題として課外学習の方法をとることがよい。1週間の期限をきめて提出させるとか，長期休暇には，相当の長文を課することも効果があろう。普通の宿題の場合には，原稿用紙で4，5枚程度が適当でないかと思う。そしてもしできるならば，十分な添削を行なって，文芸誌に発表できるまで書き直すというような指導も必要ではなかろうか。本校では従来，1年生の夏期休暇には自叙伝を課している。大体30枚～50枚の長文であるが，全生徒が熱心に10数日をついやして書いているのを見ても，このような試みが，案外生徒にも興味深く感じられることだと思う。2年の夏休みには，読書評論か，文芸作品の宿題を課しているが，これでも，生徒が真剣に取組んでいる態度が見受けられる。これからはこれらについての一貫した指導計画が必要である。

以上述べたような諸問題について，適切な指導計画が十分にできあがらなければ，切角作文指導を強調しても，その効果があまり期待できないのではあるまいか。

6 む す び

新指導要領の趣旨を汲んで，いかにしたら最大の効果が発揮できるかを，今から熱心に考えておられる諸先生方も多いことであろう。作文指導は実に厄介なものであり，作品を読んで添削してやる時間は実に大変なものである。そして労して益少なしというような結果におちいり易い弊もある。それらの諸問題に真剣にとりくんで，技術的な工夫の如何によっては，時間上の負担もある程度軽減されると思われるので，なんとか直面する困難点にぶつかっていって，作文指導の実を上げたいと念じている。作文教育は，文を通して人間を作り上げてゆく，最も緊密な人間形成の方向であろう。人間の思想が最も正確に表現され，最も精密に作りあげられてゆくのは作文であるという信念に目覚めて，われわれはこの問題に対処してゆきたい。

この小論は，その理想にくらべてあまりにも貧弱な内容のものであるが，ともかく，今年1年作文指導計画をたてて実際にやってみようと心掛け，はじめの考えからはるかに遠い実際に終ったのであるが，これを一つの目やすにして来年度の向上を期したい。更に，38年度には，ある程度自信の持てる指導を行ないたいと思っている。幸いに読者氏の厳しい御指導を仰ぎたい。